

論文審査報告書（課程内）

大学名 早稲田大学
 研究科名 大学院人間科学研究科
 申請者氏名 巢山 晴菜
 学位の種類 博士（人間科学）
 論文題目（和文） 拒絶過敏性の認知行動的特徴と抑うつ気分への影響
 論文題目（英文） Influence of cognitive-behavioral features of interpersonal rejection sensitivity on depressive mood

公開審査会

実施年月日・時間 2016年6月27日・15:00-16:00

実施場所 早稲田大学 所沢キャンパス 101号館 107教室

論文審査委員

	所属・職位	氏名	学位（分野）	学位取得大学	専門分野
主査	早稲田大学・教授	鈴木 伸一	博士（人間科学）	早稲田大学	臨床心理学
副査	早稲田大学・教授	熊野 宏昭	博士（医学）	東京大学	臨床心理学
副査	早稲田大学・教授	嶋田 洋徳	博士（人間科学）	早稲田大学	臨床心理学

論文審査委員会は、巢山晴菜氏による博士学位論文「拒絶過敏性の認知行動的特徴と抑うつ気分への影響」について公開審査会を開催し、以下の結論を得たので報告する。

公開審査会では、まず申請者から博士学位論文について30分間の発表があった。

1 公開審査会における質疑応答の概要

申請者の発表に引き続き、以下の質疑応答があった。

1.1 **コメント**：中間発表会以降、主査および副査のコメントに対応した丁寧な修正が成されており、全体として論旨が明確な論文構成となった。プレゼンテーションもわかりやすい発表であった。

1.2 **質問**：本研究はストレス生成モデルに基づく対人ストレスに関する研究を行っているが、従来の素因ストレスモデルとの違いや、意義は何か。

回答：従来の素因ストレスモデルが検証してきたストレッサーへの対応の個人差という観点に加えて、個人の特性が対人ストレッサーの発生や経験頻度すらも自ら増やす可能性があることを検証した点で意義があると考えられる。

1.3 **質問**：本研究は、これまでパーソナリティ要因として扱われてきた拒絶過敏性の概念を、認知行動的特徴から捉え、ストレス生成要因として研究したとのことであるが、本研究で扱っている認知行動的要因のうち、全般的でかつ一般性の高

い特性的な要因と、状況に依存した一過性要因との関係性はどうか。 **回答：**特定の状況下で生じる一過性の要因は、不快気分の減少や拒絶阻止といった負の強化あるいは阻止の随伴性で強化されていると考えられる。そして、その一過性の要因が強化されることにより、より特性的な要因が形成・維持されていくと考えられる。

- 1.4 **質問：**拒絶過敏性が対人ストレスを作り出し、それが抑うつへと発展するという考察が述べられているが、それらは、因果関係というよりは、抑うつに脆弱な状態像に内包される類似概念、あるいは相関関係に過ぎないのではないか。

回答：本研究は、実験刺激を用いたアナログ研究に基づき、変数間の関連性から3者の関係性を考察しているので、ご指摘の点は本研究の限界として否定できない。しかし、縦断的研究として行った研究4-2においては、実験時には対人ストレスと抑うつ状態に関連が認められなかった一方で、実験実施時の対人ストレスと実験後3か月間の抑うつ状態の変化量の間の中程度の相関が認められるという結果が示されており、実験操作として行われた拒絶過敏性や対人ストレスが、その後の抑うつ状態の変化に何らかの影響を与えている可能性は考えられる。

- 1.5 **質問：**拒絶過敏性を測定する尺度の妥当性の検証に用いる参照尺度は、信頼性と妥当性がきちんと検証された尺度であるべきではないか。

回答：本研究の目的にかなう参照尺度として、内容的にも尺度構成の方法論としても慎重に吟味し、問題がないものと判断して使用した。しかし、ご指摘のように学術性の高い論文の引用ではないという点は、本研究の限界であるといえる。

2 公開審査会で出された修正要求の概要

- 2.1 博士学位論文に対して、以下の修正要求が出された。

2.1.1 本研究で扱われた拒絶過敏性の各要因について、特性的な要因として位置付けられるものと、状況依存的な要因として位置付けられるものとをわかりやすく整理して記述すること。

2.1.2 拒絶過敏性、対人ストレス、および抑うつとの関係性について考察を深めること。

2.1.3 妥当性の検証に用いる参照尺度の適切性について考察すること。

- 2.2 修正要求の各項目について、本論文最終版では以下の通りの修正が施され、修正要求を満たしていると判断された。

2.2.1 特性的な要因として位置付けられるものと、状況依存的な要因として位置付けられるものを整理し、状況依存的な要因が日常の対人ストレス経験の中でどのように強化され、それらが特性的な要因にどのような影響を及ぼすのかを考察として第5章に加筆した。

2.2.2 拒絶過敏性、対人ストレス、および抑うつとの関係性について、本研究の知見から考察できる点と、本研究の限界として今後の検討が必要な点を整理し、第5章において考察した。また、その考察において、修正要求2.1.1にある、拒絶過敏性の循環的な形成プロセスと、対人ストレスおよび抑うつとの関係

性についても第5章において考察した。

- 2.2.3 拒絶過敏性尺度の妥当性の検証に用いる参照尺度の適切性について、本研究の限界として第2章に加筆した。

3 本論文の評価

- 3.1 本論文の研究目的の明確性・妥当性：本研究は、抑うつ障害の主要な背景要因として指摘されている対人ストレスの生成要因としての拒絶過敏性に着目し、その特徴を認知行動的観点から検討し、抑うつ状態の維持・増悪に至る心理学的プロセスの解明を試みることを明確な目的として設定している。この目的は、抑うつ障害の予防や青年期が抱えやすいストレス問題のマネジメントの観点から、臨床心理学研究として妥当なものであると判断できる。
- 3.2 本論文の方法論（研究計画・分析方法等）の明確性・妥当性：本研究は、上記の目的を達成するために、研究の中心概念である拒絶過敏性の概念構造の検討および測定尺度の開発を行った後に、拒絶過敏性の下位概念および関連要因を操作・統制した精緻な実験計画を明確に設定してデータ収集を行った。さらに、得られたデータについて、当該研究領域および先行研究等で妥当な方法とされている手法を用いて、拒絶過敏性の有無による抑うつ状態の差異、ならびにそれに及ぼす要因の影響性について解析を行い、一定の結論を得た。これらのことから、本研究の方法論は妥当な方法であると判断された。
- 3.3 本論文の成果の明確性・妥当性：本研究の成果は、拒絶過敏性が対人ストレスの生成要因となり、その影響性は、拒絶に対する恐れを先行要因として拒絶予期から拒絶知覚に至るプロセスが抑うつ気分を増大させるという認知的プロセスと、拒絶に対する回避的態度を先行要因として、拒絶予期から拒絶阻止の行動に至るプロセスが抑うつ気分を増大させるという行動的プロセスの両側面から説明可能であるという明確な結果としてまとめられている。これらの知見は、先行研究と照らし合わせても、抑うつ障害の背景となる対人ストレスの生成メカニズムを説明する新たなモデルとして妥当なものであると判断できる。
- 3.4 本論文の独創性・新規性：本論文は、以下の点において独創的である。
 - 3.4.1 抑うつ障害の発生機序に関する心理学的研究は、これまで主に素因ストレスモデルに基づき、ストレスラーに対する認識や態度の個人差の観点から検討されてきた。それに対して本研究は、ストレスラーの経験頻度自体を高めるような先行要因としての認知行動的特徴に着目し、ストレス生成モデルの観点から検討を行った。この点は抑うつ障害の発生機序に関する新たな視点である。
 - 3.4.2 拒絶過敏性の検討に用いられた実験課題は、これまで主に実験社会心理学研究における対人葛藤の実験パラダイムとして検討されてきた手法である。本研究では、この手法を臨床心理学研究に応用し、抑うつ障害の発生機序の解明に資する知見を得た。この点は、抑うつ障害の発生機序に関わる健常群から臨床群への連続性を検証するための新たな方法論を提案したと言える。

3.5 本論文の学術的意義・社会的意義：本論文は以下の点において学術的・社会的意義がある。

3.5.1 近年、職場や社会への適応上の問題として、抑うつを主訴とするメンタルヘルス不調が大きな社会問題となっており、その背景として対人ストレスや対人葛藤が主要な要因として指摘されている。本研究は、対人ストレスを自ら生み出しやすい脆弱性としての拒絶過敏性という概念に着目し、抑うつ状態に至る認知行動的プロセスを解明したことは臨床心理学の観点から学術的意義が高いといえる。

3.5.2 本研究で得られた知見を臨床応用していくには、さらなる研究の蓄積が必要ではあるが、対人ストレスを背景とした社会問題として指摘されている青年の早期離職の予防や、うつ病休職者の復職支援等に应用されることによって、新たなストレス・マネジメントプログラムの立案やメンタルヘルス対策に貢献できる可能性がある点は社会的意義がある。

3.6 本論文の人間科学に対する貢献：本論文は、以下の点において、人間科学に対する貢献がある。

3.6.1 対人相互作用は人間の営みを支える根幹であり、まさに人間科学が取り組むべき主要なテーマであると考えられる。本研究は、対人相互作用を阻害する個人の心理行動的な脆弱性に着目し、個人および周囲の人間、さらには社会の中で生じる悪循環を理解する新たな視点を提供した。これまで対人ストレスは、個人の適応上の問題だけでなく、組織風土や社会問題の背景要因としても指摘されている。本研究が、それらを理解するための新たな視点を提供した点は人間科学に対する貢献といえる。

3.6.2 本研究で用いられた実験課題（サイバーボール課題）は、実験社会心理学や神経科学の領域でも広く活用されている課題である。この課題を用いて得られた本研究の臨床心理学的知見は、隣接領域での同課題を用いた研究データとの相互理解や、融合領域での新たな研究テーマの立案に資するものであり、人間科学の観点から意義深い。

4 本論文の内容（一部を含む）が掲載された主な学術論文・業績は、以下のとおりである。

- ・巢山晴菜，貝谷久宣，小川祐子，小関俊祐，小関真実，兼子唯，伊藤理紗，横山仁史，伊藤大輔，鈴木伸一： 2014 本邦における拒絶に対する過敏性の特徴の検討 -非定型うつ病における所見-。心身医学，54 巻 5 号，422-430 頁。
- ・巢山晴菜，兼子唯，伊藤理紗，野口恭子，貝谷久宣，鈴木伸一： 2015 拒絶に対する過敏性がうつ症状の継時的変化に及ぼす影響の検討。心身医学，55 巻 9 号，1047-1054 頁。

5 結論

以上に鑑みて、申請者は、博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと認める。

以上